仮面ライダーディケイド×ＩＳ（インフィニット・ストラトス）×とある科学

投光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド×ＩＳ（インフィニット・ストラトス）×とある科学

【Ｎコード】

Ｎ５４７９Ｚ

【作者名】

投光

【あらすじ】

仮面ライダーと二つの科学が交差する

注）学園都市はあまり関係がなくなります

駄文ですがよろしくお願いします

プロローグ

「会場は、ここだな」

一人の１６歳ぐらいの青年が広いホールみたいな会場を見てそうつぶやいた

「任務、開始（スタート）」

彼の言う任務は、試験会場の護衛であり、試験官みたいな役割である

そのため決死って迷子になってはならない

「・・・・・やば、迷子だ」

前言撤回だ、こいつは迷子（ばか）だ

「あり～おかしいな～後輩を連れてきたのにな～」

もはや、哀れとかしかいえない状況、しかもどんどん奥にはいっていく

「やはり戻ろうか？こうならこの会場ごとば――――――ん？」

見ると、同じ状況なのか一人の制服を着た生徒が迷っていた

「あの～、試験会場はこっちですかね～」

等々にそんなことを聞かれた

「・・・い、一応いっておこう、俺は風紀委員（ジャッジメント）だ」

しかし、彼は風紀委員ではない、その説明はまた次回だ

「あ～あの学園都市の」

「でも、何でですか？ここ、学園の『外』ですよね？」

「なんか？とびきり大事なことがあるとかないとかで、呼ばれたんだ」

「ふ～ん」

「あ、そうだここにいきたいんですけど？」

「あ～～っう・・・・・俺も、迷子なんだわ」

「え～～～！！」

とりあえず、二人で試験会場もとい出口を探している

「あり？そういやぁ～まだ名前聞いてなかったな」

「はい、俺、織斑一夏（おりむら いちか）です」

「おう、俺は、十年士（とおねつかさ）だ」

「さ～て～、とりあえず部屋をあたるだけあたろう」

「はい！」

で、いろいろ迷った結果ある部屋についた

あったのは、

「・・・ＩＳだよなぁ～あれ」

「たしかに」

ＩＳ，この世界では、学園都市の『外』の兵器としては最強を誇る兵器である。はっきいって学園都市とＩＳが戦えば世界がふつ～に壊れるといわれている。なので、学園都市とＩＳ委員会は戦争をしないという名目でこれまでの平和に保たれていた

「・・・・・面白そうだ、触ってみるかぁ、織斑」

「え～！・・・でも、面白そうですね」

その部屋に一つだけ置いていたＩＳに一夏が触った

ピカーーン！ＩＳの起動音が聞こえた

「うわっ！え～～起動したぜぇ～い、織斑くんよ～」

「いやいや、おかしいですって、ほら、ＩＳから離すと移動音がなくなりましたよ」

織斑はＩＳから手を離した

「・・・・・じゃあ、見間違いじゃないか俺が試す」

士も触ってみた、すると

ピカーーーーン！と起動音が聞こえた

その時、バタン！と閉めたはずのドアが開いた、中に複数の女性がやってきた

「あなたち何やっているの！」

「防犯カメラで見たけどもう一人いたなんて、おどろきよ！」

女の人全員が携帯をかけている

「やばいことになったね～織斑くん」

「そうですね」

二人はたちすくしかできなかった

ＥＰ２，入学（前書き）

オリキャラ紹介
十年士（とおねつかさ）
性格：あまり女には興味がなく、基本的にだれでも優しく接するのでよく誤解される、だが特定の人間にしか本当のことを話さない
特徴：どこかで人間を差別しているのか、差別している人間にはフルネーム、認めた人間は上の名前で呼ぶ、下の名前で呼ばれる人間はあまりいない

EP2，入学

「ああ、学園都市はお前にまかせるよ、――――あ？・・うん、荷物は『外』のホテルに送ってもらった。おう、・・・まぁ、こっちのことは心配ないから安心しろ――――――じゃあな」

士は携帯を切った、それと同時に黒いスーツを着た女性が入ったきた

「おい、士、お前誰に電話していた？」

女性は知り合いに話す口調で聞いていた

「いやいや、・・・・ただ、しいていうなら不格好な携帯を持ったダチかな・・」

「そうか」

女性は少し黙った

「そういやぁ～あ、学園都市と戦争にならなかったのか？・・・・織斑さん？」

「ここでは、織斑先生だ、ばかもの」

「へいへいよ～」

ただ、学園都市とここでは『上』と呼ばれるＩＳの組織の上司が一時的な口論となり、戦争の引き金にもなると予想はさ

れた、だがどちらも望むことのない結果だったのでどこの組織の勧奨を許さないＩＳ学園に入れることでこの問題は解決した、その問題があって彼は、入学式にでれなく、１日遅れで入学するかたちになった

「・・・・・・あいかわらず、私は認められてないか？」

「いんや、織斑さんを認めたら俺が認めた人間が可哀そうになるからさ」

士は、それだけ言うと織斑先生と教室に行った

「お前たち、席に着け、今日は転校生を紹介する」

教室の中から織斑先生の声が聞こえ、スパーーーンと音が聞こえたが無視をしていた

「はいれ」

士はめんどくさそうな顔をしたがすぐにまじめな顔をした

「みなさん、初めまして今日から一緒に勉強する十年　士です、よろしく」

ありきたりな挨拶をしたが拍手もなく沈黙が続いた

「（あり～、間違えたかな～）」

前を見たらほとんどの女子生徒が小刻みに震えていた

「「「お」」」

「お？」

「「「男だあああああーーーー！！」」」

女子生徒が騒ぐ中、織斑先生と副担らしき女性が困った顔をしている

そんな中、

「あれ、士、俺てっきり学園都市に戻るのかと思っていたぞ」

空気の読めない発言に女子生徒の黄色い歓声が止む

「あれ？十年くんと織斑くん知り合いなのかな？」

「いやいや、どう考えても違うわよ」

「だって学園都市の人ですもの」

さまざまな言葉が飛ぶなか、副担の先生がまとめる

「はいはい、静かにしてください、十年くんの席は織斑くんの後ろです」

明らかに順番的に違うのだが、先生たちの配慮だろ

席に着いた士は織斑に質問に答えていた

「なんで入学式にでなかったんだよ？」

「うん？学園都市の中からでていくための資料製作が大変でな～」

「ふ～～ん、そうなんだ」

「おい、二人とも」

織斑の顔色がどんどん悪くなるゆっくり後ろを向く

織斑周りも静かになる

「ち、千冬ね「織斑先生だ」――織斑先生なんです

か？」

手には出席簿があり、織斑の頭をたたく、スパーンの音はこれだと思った

「いって～～～～！」

織斑が自分の頭を押さえる

「次は、転校そうそう馬鹿をやった十年、お前だ」

出席簿が振り下ろされるが、そのまま空振りに終わった

「何？」

士の体がなかったからだ

「やれやれ、だれだ～こんなところにペンを落としたのは？」

机の下から士が出てきた、どうやらまぐれでうまく逃げれたのだろう

本当にまぐれなのだろうか？

「ふっ、まぁ今回は見逃してやる、これでＨＲは終わる、以上」

二人の先生は教室から姿を消した

「よかったな、士、まぐれでもあれを受けなくて」

「ん？ああ、そうだな」

士は手を興味無さそうにひらひらと振る

「（あれ？　士のやつ、ペンなんて持ってないじゃないか？）」

４時間目も終わり、さすがに疲れたのか織斑はグダァーーと机に倒れていた

「はっはっは、織斑くんも情けないねぇ～」

「・・・・その言い方、今は突っ込まないでおく」

どうやら、かなりお疲れの様子だった

「・・・・・ちょっと、よろしくて？」

不意に後ろから訪ねてきた、士と織斑が振り向くと金髪のお嬢さんらしき人物がいた

士は一瞬顔を嫌にした後、部屋を出て行こうとした

「お、士さんにも、ようがあるのですよ！」

「・・・・・・・・・」

「なんですか！そのうわっなんだよ、みたいな顔、いいから戻ってきなさい！」

もうちょっとでとどくドアを名残惜しそうに見た後、士は自分の机に戻る

「・・・・・で、用ってなんですかな、お嬢さん」

「人を子供扱いしないでくださいな！・・・んっんまぁいいですわ」

「なぁ、士・・・」

「なんだい？織斑くん」

「この人・・・・・・誰？」

「まぁ、私を知らない！このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生であり入試首席のこの私を！」

「セシリア・オルコット・・・・んすぅ～う？どうか

っで・・・」

俺が試行錯誤している間に織斑が質問をした

「代表候補生って、なんだ？」

その質問はありか？士以外の教室にいた女子はどうもこけたらしい

「あのな～織斑くん、代表候補生ってのは国家代表ＩＳ操縦者のその候補生、確か学園都市の中にＩＳ代表候補生という名目で簡単な検査だけで入れた気がしたなぁ～？」

「へ～代表候補生ってそんなにすごいのか～、てっよくよく考えたら彼女と士って知り合いなのか？」

と何気に感心したり突っ込んだりする織斑だった

「あり？たしかオルコットって・・・」

「あいかわず、冗談のお得意な方ね？」

「いんや、やっぱ知らないなぁ～」

パァン！と何かをたたく音がした、セシリアが士を平手打ちしたのだ

「ひ、ひどいですわ士さん！何も、何も覚えていないなんて！」

セシリアはただ教室から出て行った、数人の女子がセシリアを追いかけて出て行った

「・・・・・・・・・」

士は何も言わず、真っ赤な頬を手で押さえていた

「おい、冗談はきついぞ、士」

織斑は、机から立ち上がっていた

「・・・・彼女のことは覚えているよ、ただ・・・・」

「え？おい、士！」

士は何も言わず出て行った

「――――――おぅ、俺だ、急にわり～な・・・・セシリア・オルコットという名に覚えはないか？――――そうか、そんな約束を、いや、後遺症じゃないんだ、タダ純粋な物忘れだ、へっ

心配性だな、あ？違う！？・・・・まあいい、じゃあなっ」

ここは士が誰もいないと踏んだ外のベンチで携帯をしていた、本来なら生徒は所持を禁止されているが、学園都市とのコンタクトをするため必要だとＩＳ学園も所持を許可してくれたのだ

「・・・・・やっぱ、俺」

「どんどん、記憶が消えてんのかな？」

士はベンチをおもっいきり叩いた

EP3，クラス代表？

「今年のクラス代表を決めてもらいたい」

休みの次の時間、織斑先生が授業の前にそんなことを言った

なぜか一人いないクラスのみんなに

「ん？十年はどこ行った、織斑」

「え？士はどこに行ったって・・・」

事情を知っている織斑にとって言うべきか言わざるべきかわからなかった

しかし、

「いんやぁ～おかしいねぇ～迷子だわ、ま・い・ご」

バタンとドアが開いたらそこには士が立っていた

「あ、授業始まっていましたか？・・・・」

そう言いながらも何気に席に座ろうとする士を織斑先生が止める

「貴様・・・私の授業がそんなにつまらないか？」

「・・・・そんなつまらないことで休むほど俺はバカじゃありませんよ」

士は手で電話の合図を出した

だが、それでも背景に炎が見えてしまう

「言ったはずだ、二度はないと」

今度こそ、出席簿ではなくグーが飛んできた

が、

がすん、と殴った音じゃない音が聞こえた

士が振り下ろされた鉄槌（パンチ）を手で受け止めていたからだ

「・・・・・俺だって、この鉄槌は死んでも受けたないんでね」

織斑先生が手を士の手から外した

「・・・だが」

「へ？」

がすん！と織斑先生のもう片方の手から出席簿が振り下ろされた

「・・・・・っう～～」

あまりの痛みから悲鳴も出ない士

「私のパンチを受けとめるのはたいした腕だが、まだまだ甘いぞ十年」

織斑先生は教壇に戻った

「さて、バカが遅れたのでもう一度説明する、このクラスから今年のクラス代表を決めてもらいたい、自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

「はい、織斑くんを推薦します」

クラスの女子生徒の一人がほぼ即答の速さで言った

「はい、私も」

「私も」

クラスからつぎつぎに手が挙がる

「え？何で？」

「おぉ～、織斑くんがんばれ、がんばれ」

「なに、他人事みたいなことといったるんだよ」

「なにって、本当に他人事だからだね～」

と、男のないげない会話をよそにどんどん話が進んでいく

その中に

「はい、私は十年くんを推薦します」

「私も、それがいいと思います」

「いいよね～」

「ほら見ろ、お前も選ばれているじゃないか」

織斑が少しにやけた顔で士のほうを見る

「・・・・・・」

「ん？、士？」

疑問に思うのも無理わない、士はふざけて嫌そう

な顔をするのではなく、本当にいやな顔をしていたのだから、違和感はあった

「お～い、士ぁ～」

「ん、ああ、何かな、織斑くん？」

何を聞いたらいいのかわからなかった織斑は、少し困ったが話をしだした

「いや、お前もいいかげん、俺のことを一夏って呼べよなぁ～って思って」

士は鼻で笑った

「・・・いや、俺は織斑くんと呼ばせてほしいな、悪いかい？」

「いやいいんだ、ただ、友達はみんな俺のことを一夏って呼ぶから、つい」

「俺も友達って思っているよ～ただねぇ～～」

「ん？士、どうしたんだ、相談事だったｒ」

「いんや、いんやなんでもない、それよりも何か決まったみたいだぜ」

士が首で前を見ろのサインがあったので織斑は前も見て愕然とした

「それでは、織斑　一夏、十年　士から代表を決めるぞ」

織斑は焦っていたが士はただ楽しそうにその光景を見ていた

「待ってくれ、俺は――――――――」

「納得がいきませんわ！」

一課が否定をした時、後ろから聞いたことのある声が聞こえてきた

「・・・・・セシリア・オルコット」

「そのような選出は認められません！男がクラス代表なんて言い恥さらしですわ」

クラスの全員がセシリアを見ている中、士だけが前を向いていた

「それに・・・・」

セシリアは口をかみ、士のほうを見た、士はそれ

を無視するように前を向いていた

「だいたい、文化としても行進的なこの国に住まなければならない私の苦労が――――」

「セシリア・オルコット！！」

叫んだのは、ずっと前を向いていた士だった

「な、なんですの、今更謝っても遅いんですからね」

その話を無視するように士は机に座って話を勧める

「これは俺の独り言だが、学園都市のダチに代表候補生と言う名目で学園都市に入った人間を調べてもらった、その中に・・・あんたの名前があった」

「じゃあ、思い出してくれ――――――――」

「独り言だから答えられないが、学園都市に入ったあんたの案内役をしたのがこの俺だ、そしてこんな約束をしたらしい『いつか・・・あんたの名前を呼べる日が来れば、お前を、本当の意味で・・・愛せる女になるだろう』とふっ、我ながらうまいことを言ったねってね」

その時、クラスの女子が

「「「きゃあーーーーー！！」」」

だの、「狙ってたのに～～」

だの、明らかに告白と受け取れる言葉に興奮していた

「だが、俺は覚えていない」

その言葉に、教室が静まり返った

「そう、ですか・・・でも、なぜあの休み時間の時！私の名前を――――」

「なら、今からおまえと話をしてやる、セシリア・オルコット・・どう考えてもクラス代表は一人だ、だからお前が勝ったらお前の質問に全部答える、出来る限りなぁ、だが、俺が勝ったら・・もう、あの時の記憶を思い出させないでくれ・・・どうだ？」

セシリアは困惑したが、立ったまま悩んで答えを出した

「・・・いいですわ、かならず、かならずあなたのことを全部聞きますから！」

セシリアは士に、ビシッと指をさし宣言した

「ふっ、わけないぜぇ～セシリア・オルコット」

「はぁ～いい感じでしめたいが、オルコット、十年、織斑、クラス代表はもちろんＩＳで決める、試合は次の月曜、第３アリーナで行ういいな」

「ちょっ、ちょっとまってよ、千冬ね「織斑先生だ」――――織斑先生、明らかに俺はのけ物の方がいいんじゃないですか？」

すると士が織斑の肩をたたいた

「どんまい、織斑くん」

簡単に言おう、織斑くんは今はのけ物であると・・・

お詫び

感想の中にこの私、仮面ライダー死鬼が他人の感想から逃げていると言う感想がありました。

いま思えば私はみなさまからの感想を受け付けないようにしていました、

自分の未熟さを痛感しました。

今回のこのお詫びで、まだ許せないとお思いになられる人がいるのでしたら、私の二次小説作品はご覧にならなくて結構です。しかし、許すと言ったら変な言い方になりますが、今までのふざけた私の身勝手なことを許してくれるのでしたら、私はとてもうれしいです。

今までとは違い感想を受け付けますので、どうかこの私の今まで身勝手な行動を許してください、お願いします。

ＥＰ４，ＩＳ，ディケイド（前書き）

明けましておめでとうございます
相変わらずの駄文です

EP4，IS，ディケイド

「たのむ、士！ＩＳの訓練手伝ってくれ！この通り！」

織斑は士の机り向き手を合わせ士に指導してもらおうと頼んだらしい

「いや、無理だから織斑くん」

「そこをなんとか、頼む」

このくだりが何回続いたことか、もう次の授業まで時間がない

「・・・・・ん？」

士は悩んだふりをして目を泳がせていたら窓側の長い黒髪の女の子が見えた

「ふ～～ん・・・あの子、織斑に？・・・まさかねぇ～」

「えっ、士？どうしたんだ箒の方を向いて」

どうやら、さっきの士の言葉は聞こえてないらしい、それより

「箒ぃ？お前・・・まさか」

「おう、彼女は篠ノ之（しののほうき）箒て言って俺達は幼馴染なんだよ」

笑顔で言える織斑くんが怖いと思った士である、そして士が一瞬眉間にしわをよせた

「んじゃ、あの子に教えてもらえよ、織斑くん」

「え？士なんでだよ？」

疑問に思っている織斑に士がやれやれと説明する

「あのなぁ～俺とお前は次、戦うことがあるかもしれない、それに、俺よりも幼馴染さまに教えてもらう方がいいに決まっているだろうがよ」

「ん～～確かにそうだけど」

「おら、前を見ろ、次の授業、織斑先生だぞ」

そして、次の授業が始まった

授業が終わり放課後の職員室、織斑はさっき篠ノ之さんにＩＳの訓練をつけてもらいに行ったらしい

「失礼しま～す、織斑　千冬先生はいますかねぇ～山田先生」

「えっそ、そうですね。あ、いましたよ織斑せんせ～い」

手を振る山田先生を横目で見ながら織斑先生は士の頭上にパンチを落とした

だが、士はそれをよける

一瞬悔しそうな顔をした織斑先生は何もなかったように手を組んだ

「職員室に入る時は、ちゃんと挨拶しろ、バカ者」

「へいへい、んでちょっと話があんだわ、千冬先生」

一瞬驚いた顔をした織斑先生だったが、すぐに顔を戻した

「こっちに来い」

「ほ～～い」

士が連れてこられたのは職員室の近くの相談室だった

「で、話はなんだ？士？」

入って早々、織斑先生が聞いてきた、

士は適当にあったイスに座る

「織斑　千冬、お前、俺にわざとこのクラスにしたのか？」

「何のことだ？」

「とぼけるな！篠ノ之　箒、あの女、あいつの妹か？」

「そうだ」

「・・・・・・・」

真面目な顔になった士は、ただ自分の手を見ていた

「んじゃ、邪魔したな」

出て行こうとした士を織斑先生が止める

「殺すのか？篠ノ之を」

士は鼻で笑った

「まぁ、妹だからといって、殺すのは俺の主義じゃねぇんだわ」

織斑先生は手をのけ、士を通した

「あと、これは、決まったことで異論は認めんがお前の部屋は私と同じだ」

織斑先生は士に部屋の鍵を渡した

「へっ、寮長室かい」

「文句を言うな、ちなみに私が1年の寮長だ」

「まぁ、そうなるわな」

士はその場から一歩も動かなかった

「ん、あぁそうだ、俺、次の月曜までちょっくら学園(あ)都市(っち)までかえるわ」

「なぜだ？」

「俺のＩＳを迎えにいかないといけないんでねぇ～」

「・・・・わかった」

「んま、適当な理由つけといてくれや」

士は歩き出し、ＩＳ学園から出て行った

次の月曜日・・・・・

ここは、ＩＳを待機させておく場所だろうか中には、織斑、篠ノ之さんがいた

「士の奴、まだ風邪治ってないのですか、織斑先生」

「心配するな、織斑、あいつは来るさ」

「あ、織斑くん君のＩＳが来ましたよ」

その時、

ブゥーンと何かのエンジン音が聞こえた

「おい、一夏この音」

「気をつけろ、箒」

「なっ・・・／／／／」

篠ノ之さんが赤くなっているの知らず、織斑は真面目な顔だ

バイク音が近くなる

そして、バイクが見えてきた

バイクは尋常じゃないスピードで織斑たちに迫っていた

だが、バイクは二人にぶつかることなく止まった、言い方を変えればバイクが二人の少し前で右にずれそして、壁にぶつかった

「あって〜〜な、こっちが事故ったわ〜〜」

あまりの大惨事に二人は状況が飲みきれていないらしい

バイクに乗っていた男は二人の目の前まで近づいた

「久しぶりだね〜織斑くん」

「お前、その声、士なのか？」

何も言わずヘルメットを脱いだら案の定、士だった

「あ、んまそうなんだけどよ、背中いって」
そう言いながらのバイクの方に行きバイクを立てる士
「てか、いったい何なんだよそれ」
「俺の専用機かね」
士がバイクをぽんぽんたたく
バイクはあれだけの事故なのに傷一つなかった、むしろ壁の方がかなりひどいことになっている
「おい、士、てめ～なに、かっこつけて事故ってんだ、情けない」
今度は奥から士や衣織斑と同じぐらいの男性の声が聞こえてきた
「おいおい、こっちはけが人だぞ、巧(たくみ)」
「といって、怪我なんかしてないだろうが」
「まぁ、たしかに」
出てきた男は灰色の肩までの髪があり、目は黒い、士と同じぐらいの背がある
「士、この人は誰だ？」

「でていけ、ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」
篠ノ之さんが敵意をむき出しにするが、巧はそれを無視する
『久しぶりだな、赤光（せっこう）　巧（たくみ）』
スピーカーから織斑先生の声が聞こえた
「おう、じゃあ今からそっちに行くからな」
巧は再び奥に消えていった
『最初は、士お前が行け』
「え～俺が～」
『壁代を弁償させるぞ』
「はいはい」
しぶしぶ、士はジャケットを脱ぎバイクにまたがった
「着てたんだな、ＩＳスーツ」
「おう、これで外にいたら寒くてねぇ～」
士は、グリップを握るとエンジンがかかった

「こい、ディケイド」

そして、士の乗っていたバイクが消えＩＳが現れた

色はマゼンタ、姿は仮面ライダーディケイドには似つかない形だった、ただディケイドらしさと言えば胸の部分に黒と白の右に寄っている十字のマークだけだ

「んじゃ、行ってくるわ」

「おい、士、気をつけろよ」

その言葉の後、士は何も言わずに出て行った

EP5，戦闘

アリーナに出た士は、空中に留まらず地面に降りた

上にはオルコットがいた

「出来ればあの邪魔者（織斑　一夏）を先に片付けたかったですわ」

「心配ね～よ、あいつは前より体はできているみたいだからな」

「よく今までいなかったのにわかりますわね」

「あり？もしかして心配してくれた？」

「ばっ・・・ありえませんわ！」

オルコットは顔を赤くしたが士はそれをいつもの表情で見る

「さて、・・・・そろそろ始めよや」

「わかりました、私が勝ってあなたのことを根ほり葉ほり聞きましょうか！」

その言葉と同時にオルコットはライフル『スターライトｍｋ？』で撃ってきた

「じゃあ俺はそれを阻止するか」

士はディケイドの唯一の武器『ライドブッカー』を取り出した

「しゃらぁあああああ！！」

ソードになった武器を手でなで、そのまま空に飛んだ

「くっ、速い」

オルコットとの距離を詰めるのに３秒もかからなかった、しかしそこは代表候補生、数発のエネルギー弾を打った後さらに上空に飛んだ

「でも、この『ブルー・ティアーズ』に近距離型の武器で挑もうなんておかしいですわ」

その後も、オルコットの攻撃は止まらず、士は剣で受け止めるか、避けるを繰り返している

その攻防が続いて３０秒をたったが、いまだに士はダメ

ージを受けていない、逆にオルコットの方がエネルギーの無駄遣いをしているのだった

「もう！何で当たりませんの！」

ついにオルコットがしびれを切らし士に喰ってかかる

「いんや、いんや、あんたの腕も大したもんよ」

士はオルコットを褒めたがオルコットにはそう聞こえなかったらしい

「侮辱していますの？」

「侮辱・・・・あぁ～～ひどい言われよう」

隙をついたとばかりセシリアが撃ってきたが、それも士は避ける

「くっ・・」

「お遊びはここまでかな？」

「まだ・・・・・・まだですわ！ティアーズ！」

そう叫んだ瞬間、オルコットの機体の翼の４つの部分がのいた

その青みがかかったティアーズとよばれる機体は士に向かってレーザーらしきものを撃ってきた

「うおっと・・・これは・・・自立起動兵器か？」

考える暇はなく向こうは撃ってくる

「この子たちから逃れることはできませんわ」

士は避けようとしたが、ティアーズの連携に負け当たってしまった

その後も攻撃は続き煙がたつ

「これで・・・終わりましたか」

オルコットが勝利を予感したが、煙の中から士が落ちていないのを見てスターライトを構える

「自立起動型射撃武器じゃなかったか、たぶんあんたが操縦をしているんだろうか、あんたはこいつらが動いている時動かなかったか、これで想像がついた」

「（読まれた、あの少ない時間で？）」

オルコットは驚いた、自分のティアーズのことをそして、士の機体のエネルギーがあれだけの攻撃をくらってまだあるということ

「まぁ、これだけ攻撃、まだまだいけるねぇ～」

オルコットはまだ信じられなくて言葉が出ない

「がんばったんだ、俺も一つネタバレしようかねぇ～」

士は持っていたソードをしまった

「ＲＩＤＥ！」

≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＨＩＢＩＫＩ≫

電子音の声が聞こえた後、士の機体が紫の炎にのまれた

「え？・・・士さん！」

我に返ったオルコットは、そのまま士に近寄ろうとする

「いんや、心配しなくてもかまわない・・・はぁ！」

炎から出てきた士の機体は色が紫に変わり、胸には大きな角らしきものが二つ付いていた

「これで終わらす・・・・いいよな」

「なんだ、あの機体？いや、それよりも機体が変わった・・」

モニターを見ていた織斑たちは驚いている

「あれはいったい何だ？」

織斑先生が質問をするが巧は少し間を空けた

「学園都市のＩＳ・・・と言えばわかるか？」

「でも、ＩＳ自体が変わるなんて知りませんよ」

山田先生が質問するが巧は答えない

「答えろ」

沈黙に嫌気がさし織斑先生が質問を繰り返す

「士のＩＳ自体が特殊で、あれがあのＩＳの能力と言える」

「これからは、もう機密事項だ、聞きたいんだったらあいつから聞け」

巧はモニターに映った士を指差した

「そんな・・・ＩＳが変わるなんて」

「そんなこと、どうでもいい、もう堕ちろ」

そんな殺意に反応してオルコットがスターらいとで撃つが士は避ける

「また、避けるだけですの？」

「・・・ＡＴＴＡＣＫ」

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＯＮＧＥＫＩＢＯ　ＲＥＫＫＡ　≫

士が取り出したのは二つの赤い太鼓のばちのようなもの、その先端に炎がついていた、士は太鼓をたたくように降ると、炎がティアーズめがけて降り注いだ

ティアーズは避けれてのもあるが2機は炎に当たり爆破した

「くっ・・・」

士はただ爆破していない、残りのティアーズ見ている

「性能は上々か・・・・」

士はそのまま、手を上にあげ武器をしまった

「棄権します」

そしてこの戦いは終わった

「納得はいきませんわ！」

試合が終わった後、更衣室を出ようとした士をオルコットが呼びとめた

「なぜ！あなたは私との試合を放棄したのですか！？」

どうやら相当怒っているらしい

「勘違いするんじゃねぇ～よ、これはあくまで性能のテスト・・・学園都市からの命令だったんだよ」

「しかし！あなたのことを全て聞くという約束がありましたのに・・・」

「俺だって望んじゃいなかった・・・・・聞けよ、全部」

オルコットは戸惑ったが、士はいつものふざけた表情じゃなかった

「でわ、」

「・・・・・・・・」

「私との・・・その、昔の約束を本当に、本当に忘れてしまっているのですか」

「約束なんか覚えちゃいねーよ、オルコット」

泣きそうになったオルコットだが、そこはこらえた

「でわ、なぜ、忘れてのですか！士さん」

「こっから先を聞いたら、お前はぜってー学園都市を敵に回す、あげくの果ては・・・戦争だな」

「え・・・そんなこと・・・に？」

「お前も、大切なもんがあるんだろ？・・・・・ならそっち守れや」

士はオルコットの肩をたたき更衣室を出て行った

・・・・

話は変わるがクラス代表は織斑くんになったらしい・

EP6，転校生

「織斑くん、クラス代表――――――」

「なんでこうなった～～～！？」

織斑が自分の頭に手を押さえて状況を整理しているが、士の席の近くにいたオルコットが追い討ちをかける

「それは、私が代表を辞退したからですわ」

腰に手を当て得意げに話すオルコット、それを横目で見ていた篠ノ乃さんが話をそらす

「そういえば、2組に転校生が来たとうわさになっていたな」

「そうそう、確か中国から来たっていってたよ」

話を聞いていた女子生徒達がこちらに近づいてくる

「・・・・・中国・・ねぇ～」

「あら？士さんどうしましたの？」

中国と聞いていやな顔をしている士にオルコットが話しかける

「いんや、なんでもないんだよ・・・たぶん」

「またそうやって隠し事をしますのね」

オルコットがやれやれといった感じで首を振る

あのクラス代表を決める大会の後、オルコットは士に何度も話を聞こうと士のいる寮長室や教室で待ち伏せていたが、士は「聞きたきゃあ、聞きな」と投げやりな感じで接してきたのでオルコット自身を聞くのはやめようと決めたのだ

「しかし、この時期に転校なんて珍しいな」

話の中に入れなかった織斑がただなんとなくいった

その時

バン！と教室のドアが勢いよく開いたのだ

「一夏ぁ～ひさし・・・ぶ・・り」

いたのは茶色の髪をツインテールで整えた女の子だった

生き生きと入ってきたツインテールは織斑の顔を見る前に、士の顔を見て青ざめた

士はそのツインテールを見た時に、逆に今すぐ殺すといった感じの気迫をだし、腕を鳴らした

「お前か、鳳(ファン)・・・・　鈴音(メイリン)」

「あれ、おい士お前、鈴(リン)と知り合いなのか？」

明らかにさっきを読み取れていない織斑が質問してきた

「そ、そうですわ！士さん、あ・・あの女性と一体どうゆう関係で！？」

「お、お前もだぞ！一夏」

士が答える前に、オルコット、篠ノ乃さんが二人に質問した

「ん～？関係ったら、オルコットよぉ？『新装開店、クラマド全壊事件』て、言うニュースであったろ」

「え、ええ、確か半年ぐらい前に学園都市に新しく、アジア地域で人気のデパート『クラマド』がオープン1日前にぼろぼろに壊されたって・・・」

「そう、犯人そいつ」

士が首で鈴と呼ばれたツインテールを指す

ええ～～～～！！という声が教室中に響いた、教室にいた全員がその事実を聞き驚いたのだ

「ば、ばか！何でそんな昔の話を掘り返すのよ！もう終わったことじゃない！」

ツインテールが逆立ち、怒っている鈴の頭に出席簿が落ちる

「いった、なにすんの・・・・千冬さん」

「今は、織斑先生だ、ばか者」

鈴は仕方なく、１組の教室を出て行った

織斑先生が来て、全員が席に着こうとするときオルコットが士に質問する

「理由がわかりませんので・・・・その、お昼／／／一緒に食事でも／／」

手でＯＫサインを出した士、オルコットは喜んだが織斑先生のほうを見てそそくさと席に着いた

昼休み、あんなに笑顔だったオルコットは愕然としていた

ツインテールの鈴が仁王立ちして待ったいたからだ

「・・・・・あんたに用があるんだけど？」

「いいから、そこどけ、じゃまなんだが・・・」

後ろの列を見て鈴も納得する

「わかったわ、じゃあ、先に座って待っている」

先にラーメンを持って席を探しに行ったらしい

「オルコット、先に席探してくるから待ってくれるよね」

「ぐすっ・・・わかりました」

悪いなといった後席を見つけ鈴の所に行った

すぐに鈴を見つけた士は４人席に座っている鈴の前に座った

「話は何だ？はやくしろ」

オルコットを待たせるのを悪いと思っているんのかあせっている士

「クラス代表、一夏なんだって？」

「それがどうした？」

鈴の箸が止まる

「何であんたが一夏に負けたの？」

「俺は実際戦ってない、だから負けたとは言いきれない」

「そう・・・・」

鈴が箸をおいた、そして一呼吸ついた

「私、あんたと戦いたい・・・」

「あ？」

そして、鈴がさっきまでのよりテンションが上がる

「私をここまで侮辱したのあんたが始めてよ！だから先制布告よ！クラス代表があんたじゃなくて残念だけど、私を侮辱したんだから代償は高いわよ！」

「いっている意味がわからないんだが」

「だから、あんたも私と同じ土俵で戦えるんだから、あんたも負かしてやりたいっていっているんでしょうが！」

さすがにうるさくまた食堂が静かになると思ったが、外野の方がうるさく聞こえていたので、聞こえていたのは士だけだった

「・・・・・・・・・・・・」

士は無言で座っていた席から出ようとしていた

「まさか逃げるき？」

士はただ、手を上げ後ろにいる鈴にじゃあなと挨拶しただけだった

オルコットが待っている席に行くと、そこに織斑や篠ノ乃さんが座っていた

「おや、おやメンツがたくさんいますな～」

オルコットの目が恐かったが士は無視をする

「いや～助かったよ、士開いている席が見つからなくって」

「いんや、いんや・・・・織斑くん相談があるんだが」

「え、何だよ改まって、らしくないぞ、士」

士は髪の毛を掻き、一呼吸ついた

「お前の、クラス代表の訓練に付き合ってやるよ」

そのとき、篠ノ乃さんがいやな顔をいたのは言うまでもない

ＥＰ６，転校生（後書き）

今回は、戦闘なしになりました
次回には戦闘がかけると思います

EP7，触れてはならない領域

「だから、こう、ガンといってドンみたいな感じだ」

「ですから、斜め上に４度あげて、重心を５ｃｍほど下げてください」

「・・・・・ぜんぜんわから～～ん」

「はっはっは、面白いねぇ～この３人」

今、この４人がいるのは第２アリーナであり、放課後の織斑くんのＩＳ練習に士となぜかオルコットも加わった

今、篠ノ乃さんとオルコットが織斑くんの訓練をしている、二人とも真面目に教えているのに、なんでわからない？という顔をしている

今、それを見て士は、腹を抱えて笑っている、自分から志願したのにいっこうに織斑くんにＩＳを教えようとしない

「・・・・士、何でお前が教えてくれなんだ！」

「いんや、いんやこのコント・・・・もとい練習が面白くってね」

ヘルプの顔をしている織斑くんを士は手をヒラヒラさせて、手首のほうを見る

「ありゃ！もうこんな時間！？アリーナが閉まるな」

篠ノ乃、オルコット、残念な顔を、織村は嬉しいのか辛いのかわからない表情をしていた

「わかった、ではアリーナの外でな、一夏」

「・・・・あ、ああ」

オルコット、篠ノ乃さんがアリーナから出て行った、そしてＩＳを解除し出て行こうとした織斑くんを士が止める

「・・・・なんだよ、士？」

「そう怒んなって、織斑くん、アリーナ閉館時間まで、まだ３０分あるんだ、俺が教えてやんよ」

「え？でもアリーナが閉まるって」

「そこは・・・ほれ、あれだ、あれ」

「あれ？」

あれがわからない士は１０秒ほど悩んだ後、そこは飛ばした

「まぁ、とにかくまたあの二人を呼び止めて、わからな

い講義を受けるか、俺と模擬戦をしながら学ぶか、どっちがいいかい？」

「士さん！指導してください、お願いします！」

士がほぼ言い終わる前に、織斑くんが頭を下げた

「・・・・・よし、やるか！」

「あの～士さん、士さんのＩＳのバイクは？」

織斑くんが見る限り、士の周りに、士のバイクはなかった

「あれは・・・・、まぁあれ俺のなんだけど、ＩＳを入れている何たら次元の中に入れてる、織斑く～ん、バイクは変形しないよ～それに、ほれこれが俺のＩＳの待機状態」

士は自分の左耳を指した、耳には十字型のイヤリングがあった

「なるほど、そうだったのか」

「んじゃ、始めますか！」

士は十字のイヤリングに触ると、士のＩＳ・ディケイドが展開された

「御指南、お願いします」

織斑くんは丁寧に挨拶すると、『白式』の唯一の武器『

雪片弐型』を構える

「さて、殺りますか」

士は『ライドブッカー』の剣先を肩でたたく

「いつでも来い！」

「はぁあああああ！！！」

織斑くんが士に真正面から突っ込んだ

「「どうした（ましたの）？　一夏（さん）？」」

篠ノ乃さん、オルコット、そしてクラスの生徒全員は

驚いた

山田先生は汗を流し、織斑先生は士の頭を抑えていた

士は必死に織斑先生の腕から離れようと努力をしている

「織斑、何だその腕は？」

「はい・・・・・骨折しました」

士を抑えながら聞いた織斑先生は、織斑くんの腕をみて顔を曇らせた

「おい、士最後に言い残すことはないか？」

「その怒りは、クラス代表の腕を折ってしまったから？それとも最愛の弟がきずつけられてっ、ぎゃぁあああーーーー！！！」

織斑先生の腕がさらに閉まり、士はギブアップの合図を出す

「さて、これじゃあ、学年大会には出れない、誰か代わりをしたいものはいないか？」

クラスに沈黙が走ったが、山田先生が沈黙を破る

「あの～織斑先生、士くんにお願いしたらいいんじゃないかしら」

「こいつにか？山田先生」

織斑先生が士をさすが、士はピクリとも動かない

「はい、自分の不始末は自分で片付けさせたほうがって、

織斑先生！士くんが！」

織斑先生は仕方ないという顔をして士を解放した

「ぐっ、い・いくら弟ラブだからってここまっぎゃああああーーー」

明らかに重症だが仕方なく士が出ることになったらしい

ここはクラス代表達が戦う予定の待機室

ここで待機している士、士以外は誰もおらず、いつもの三人と先生二人はモニタールームにいる

『士、準備はいいか？』

「うん、誰もいないのはさびしい・・・」

『自業自得だ！』

『そうですわ！』

女性二人に慰めの言葉はなかった、オルコットに関

しては自分がいない間に士が戦闘をしたのが許せないらしい

「はっはっは・・・・寂しいな～～」

『何いじけている、向こうは準備万端だぞ』

士はその言葉を聞くと、ゆっくり立ち上がった

「まさか、いきなり当たるなんてねぇ～」

『士』

通信機から織斑くんの声が聞こえる

「あん？」

『いや、行ってこい！俺の分まで！』

「おう・・・・・・・んじゃあ、いきますか、ディケイド！」

光に士が包まれ、ＩＳ・ディケイドを展開した士が出てきた

そして、ブーストを加速させ士はアリーナに飛び出した

士の相手は、いきなりといっていいほどの鈴と当たることになった

そしてその鈴は士の目の前で滞空していた

士も同じく空に浮いたまま止まった

「まさか、あんたが一夏に変わって私の相手をしてけれるなんてね」

「いんやぁ～俺も驚いたよ織斑くんの体ってもろいねぇ～」

その言葉を聞いたあと、鈴の体が震える

「・・・・あんた、一夏の悪口は私だけが言えるのよ！」

鈴のＩＳ『甲龍（シェンロン）』近距離のパワータイプであり、肩に浮いている丸いのが『甲龍』の遠距離射撃武器『龍砲』３６０℃死角がなく砲身が見えないらしい

「あり？鳳さん・・・まさか、一夏のこと・・・」

「ば、ばか／／／ち、ち、違うわよ！」

否定をしながらも頬が赤くなる鈴

「さっさと始めるぞ」

流石にこのくだりはしんどいと思った士はせかす

「う・・・わかったわよ・・・・それでもう一つ条件があるんだけど」

「・・・・なに？」

「私が勝ったら、あのこと許して」

士は大きくため息をついた

「許すぅ～？ぼろぼろに負けてくれたら許す」

「ふん！どうせそんなことだろうと思ったわよ！いいわ、勝って嫌でも許してもらうんだから！」

鈴は『天双牙月（てんそうかげつ）』を取り出し突っ込んできた

「おい！くそっ」

士は『ライドブッカー』を取り出し火花が散る

「おい、ふざけんな！まだソードに変わってないのに」

『ライドブッカー』を手に持ちながらソードに変える
「へー剣に変わるんだ、私相手に近距離で挑もうなんてね」
「戦いのときぐらいは集中しろぉ！！」
今度は士が真正面から攻撃を仕掛けた
鈴は受け止めカウンターを入れる体制だが、士の攻撃に押された
「なんで？この『甲龍』が押された？」
鈴が考えるまもなく、士の攻撃は続いた
攻撃が当たるたび鈴はどんどん押される
「くっ、ふざけんなぁ～！」
その時、士の機体が黒煙を上げた
「・・・・あ？」
「これが『龍砲』よ、見えない弾丸を避けられる？」
再び見えない弾丸が撃たれるが士は避けなかった
かわりに、展開した剣の部分で受け止めたのだ

「こうゆうのは避けるんじゃない、避けないのが正解だ」

「・・・・・・・」

鈴は驚いていた、理由はどうであれ見えない砲弾を受け止めたのだ、見えない、つまり受け止めるのは不可能に近いのだ

「士さんのＩＳってあんなに速い動きしていたか？」

「い、いえ、士さんのＩＳと戦いましたがここまでは・・・」

「・・・・・・・・・」

オルコット、一夏、山で先生は驚いていたが篠ノ乃さんと織斑先生は無言でモニターを見ていた

「・・・・・まったく、勝手に試合を始めるなっつたのに」

全員の後ろから聞いたことがある声が聞こえた

「巧、来ていたのか？」

巧は手を上げ挨拶するが知らない顔をして手を下げた

「あの～皆さんこちらの方は？」

オルコットは全員に質問をするが誰も答えない

「？」

「赤光　巧だよろしく」

「まぁ、私の名前はセシリア・オルコットでイ――

――――」

「んで、状況は？」

「なっ・・・・・」

無視されたことに怒っているオルコットをなだめる

一夏と篠ノ乃さん

「説明しろ、巧なぜ士のＩＳがスピードもパワーも

増している？」

ここにいる全員の質問をした織斑先生、巧は一呼吸

ついた

「話すついでに、士の寮部屋を変えろ、一人部屋にな」

「・・・・・考えておこう」

さて、と巧がてをポケットに入れた

「もともと、初陣のときはＩＳ・ライダーシステムの実験だった」

その言葉に状況を知っていたオルコット以外は驚いた、巧は続ける

「実験の内容は専用機のＩＳを敵にディケイドの性能のテストだった、そのためディケイドには動きを専用機ＩＳの平均以下の力になるようにプログラムされていた、まぁこの場合の平均は学園都市の学者が結論で固めた平均、今のディケイドだったら、士の期待に全て答えられる用になっているな」

「でも、その実験で私の約束は破られましたけど・・・」

オルコットの独り言が聞こえたのか、巧はモニターを見ながらため息をつく

「お前にとって士はどんな存在か知らないが、お前は士のことを何一つ理解してない」

「・・・・どういうことですの？巧さん」

「言葉のとおりだ、まぁ意味を変えたらお前は知らないほうが幸せなのかもしれない」

さらに巧が続ける

「士のことを知れば、それは学園都市の秘密を知る

ようなもんだ・・・・・名で呼ばれれば話はべつ何だけどな・・」

「いつか、言ってもらいます・・・・・かならず」

オルコットは堂々と発言した、巧はオルコットのほうを見た

「お前にできるか？何も知らないお前に？」

その顔はなぜか悲しい顔をしていた

アリーナ上空、鈴『甲龍』は、ぼろぼろの状態だった

『龍砲』は攻略され『天双牙月』は士に折られ、『龍砲』だけで戦っておる状態だった

「（くそ、なんで、なんで当たらないのよ）」

エネルギーは鈴が最大の3分の1、士はまだ半分以上もある

「（でも、あれから攻撃してこない、なんで？）」

あれから、士からの攻撃があり、数回鈴が食らった所でめっきり攻撃が減ったのだ

「（いや、それよりも不意打ちで士が受けた『龍砲』の当たった部分になぜ黒煙が立ち上った？）」

通常ＩＳはシールドバリヤーに守られていて強い攻撃を当てるかしない限り、操縦者本人にダメージはない

なのに黒煙、『龍砲』じたい強い武器ではあるが近距離で撃ったとしてもシールドバリヤーは壊せない

「（一か八か）でりゃあああああーーー！！」

鈴が無防備にも士にと突撃する

しかし、

ギュオーーーンという音がアリーナの上、ＩＳの流れ弾を観客や外に流さないためのバリアーが破られ、黒い腕の長いＩＳが降りてきた

「な、なに？」

その時、士と巧は不気味な笑みを浮かべた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5479z/

仮面ライダーディケイド×ＩＳ（インフィニット・ストラトス）×とある科学

2012年1月14日22時47分発行